



大分合同新聞 朝刊一面に掲載されました。

4月29日、祝日（昭和の日）の朝刊、第一面にしかもカラーで「七島イ工芸セミナー」の記事が掲載されました。

かねてから、県内での七島イへの関心の高さが伺えます。

記事の内容は、国東市で七島イを使って工芸品を作るセミナーが思わぬ人気を呼んでいるというもの。

国東雇用促進協議会が実施する、二豊製畳両子工場での様子が詳しく述べられています。

同セミナーでは、この記事の効果もあり、毎回部屋に入りきらないほどの受講生が、先生の手ほどきを受けながら、七島イの三つ編み、円座、ラグマットの制作に励んでいます。また、来月からは畳表の制作に入るとのこと。



ケーブルテレビの取材カメラも連日撮影に来ており、人材不足の七島イ産業の関心を集めるきっかけ作りなればと期待をよせています。

このセミナーでは製品作りを通して人材育成を進めていくことを目標としています。そのためには同時に七島イの栽培、生産の拡大も不可欠になっています。

これからも地域産業全体として皆さんで「国東の七島イ」を盛り上げて行きましょう。

農業組合法人いとなが



5月27日、糸長地区で七島イの苗揚げが早朝より行われました。男性は苗の掘り起こしと土落としを。女性は株分けを一日かけて行い、合計三五〇株もの七島イの苗が出来上がりました。

青々と育った苗、夏の収穫に思いを馳せました。

第12回「国東七島蘭振興会」定例会

5月22日、西武蔵出張所にて恒例の「国東七島蘭振興会」定例会が行われました。

今回は七島イ工芸特別講座の会員およそ10名も参加し、いつもより賑やかな会議になりました。また、会員も大幅に増えました。

なかなか厳しい意見も出ましたが、これからも振興会、また七島蘭草の普及、技術向上、宣伝などさらに実りのある会にするため、皆様のご協力をお願い致します。



この人に聴く

シリーズ「この人に聴く」第4弾は七島イ問屋青木本店の青木さんにお話を伺いました。



Q 今年で問屋歴46年目を迎える青木さん 今までを振り返り少しお話を。

A 昭和42年から父より問屋業を引き継ぎ、私で三代目になります。昭和40年代まで大分の産業を支えていた七島イも、

昭和50年以降から産地の衰退が広がって行き、当時100件はあった問屋さんが現在私だけになってしまいました。それでも何とか七島イ産地を残したいという思いもあり、また今まで私達問屋を支えてくれた生産農家さんの生活を守りたく、カッコつけた言い方ですが義務感を抱いてこれまでやって来ました。

この様に衰退して行く現状の中、畳表の問屋だけでは商売として成り立たず苦労していたのですが、10年ほど前から七島イをいかした草履の生産に携わり、剥離ではあります但し今日に至ります。

Q 青木さんの記憶に残る七島イ最盛期の出荷枚数を教えてください。

A 昭和37年前後、大分県全体で約600万枚出荷したと言われています。私どもの青木本店で、40万枚出荷いたしました。まさにこの年が七島イの最盛期でしたね。

Q 今まで一番苦労したことは？

A 商売をやっている方は皆さん一緒だと思いますが、クレームと取引相手の倒産ですね。・・・これにつきます。

Q この仕事に携わり一番良かったことは？

A 各地を巡り、様々な方との交流が広がった事が一番ですね。とにかく出張が楽しかったですね。

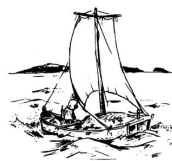
Q 振興会に望むことは？

A 新規の方や若者が参入しやすい、環境作りに努めてほしい。また、中国産に押されている状況を変えていく様に、国東七島イの品質向上に努力してほしい。

Q 最後に青木さんにとって七島イとは？

A 商売度外視（深い愛情を込めて仰っていました）

七島イの歴史



●第4回 七島イの伝来と、逸話

島民に「青くて長い草」を持ち出すことを断られた五郎左衛門ではあったが、そのまま帰るわけにもいかない。考えた挙句、竹の節を抜いて、その中にこっそりと苗をおさめ、杖のかわりとして何食わぬ顔で持ち帰ったのである。こうして苦心した挙句、手に入れた貴重な苗ではあったが、栽培方法を聞いていなかったため残念にも枯死させてしまう。

五郎左衛門が落胆したのは言うまでもないが、彼の素志は屈せず、ふたたび島を訪れた。島に留まること数十日。栽培方法を学び取り、苗は前回同様、ひそかに竹の杖に隠して持ち帰った。そして石城川（狭間町）、別の説では内城村（別府市）に植え付けたのが始まりと言われている。

この様に一人の府内商人の勇氣と開拓者精神はあとあとまで讃えられ伝記として語り継がれている。

参考文献「豊後の七島い その歴史を追って」

大分県農業技術センター 前田哲夫

七島雑感

田んぼで力を蓄えていた七島イも植え付けの時期を迎えました。農家さんによると植え付け前までに十分に手をかけてやらないと良い苗にならないそうです。目に見えるようになってからは遅すぎるといいます。今、七島イ工芸のセミナーの方たちに富永先生は、ビシビシと鍛えながらも一人一人丁寧に指導してきました。そんな彼女らが七島蘭栽培にチャレンジします。自分たちで栽培した七島イの工芸品は彼女たちに多くの力を与えてくれることでしょう。

事務局長 細田利彦

会員募集のお知らせ

途絶えつつある七島蘭の保存とともに、新しい地域産業として再生させるといふ趣旨にご賛同いただける個人ならびに企業の会員の募集をしております。

会員の方には、七島蘭の植え付け、刈り取りの農作業体験や、生産者との交流会も開きたいと思っております。途絶えようとしていた七島蘭ですが、大分県や国東市の支援により再生への道筋もようやく見えてきました。

どなたでも気軽に参加できる会にしたいと思っております。会員一同、一人でも多くの方のご参加をお待ちしております。